

待降節第4主日 A年

第一朗読 イザヤ 7・10-14
第二朗読 ローマ 1・1-7
福音朗読 マタイ 1・18-24

2025.12.21 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

クリスマスの直前の日曜日であります待降節第4主日の今日の福音では、メインの登場人物はイエスの母マリアの夫となるヨセフという人物でした。

当時の、イエス様の時代の習慣では、結婚っていうのは2段階で行われる——小さい頃に婚約者が親によって決められていて、そして、ある程度の年齢に達したら一緒に結婚して一緒に済むようになるっていう——でも婚約の期間ももう結婚生活の一部として認められているっていうわけです。で、その間にマリアが身ごもっていることが明らかになったというわけです。

これに対して、今日注目したいのは、聖書が言う「夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した」。夫ヨセフを正しい人、正義の人というふうに聖書が表現しているということです。そしてこの正しい人、正義の人の行動は、マリアのことを、起こったことを表沙汰にしないで密かに関係を解消するという判断。そこに聖書は正しさを見ているわけです。

でも、これはわたしたちの今の社会の感覚としていわゆる「正義の人」という人の行動パターンとはだいぶ違うように思います。わたしたちがちょっと考えるその「正義の人」っていうのは、起こったことが何なのかっていうのを白黒はっきりして、そしてそれをみんなの前に公表して、場合によっては相手に罰を与える、あるいは自分の受けた損害の保証を求める、それが「正義の人」の行動のように思いますね。

でも、ヨセフはそのようにしない。でも聖書はそれを正義の人と呼んでいるわけです。わたしたちの中には正義の名の元に他の人を攻撃するっていう動物としての傾きがあると言われています。

正義の名のもとに誰かを攻撃するというときに快楽を感じる物質が脳内に出るんだと最近言われていますけども、ヨセフはむしろそういうような人間の動物として持っているその傾きに支配されていない。むしろ未来に向けて、自分が分からぬことは分からぬこととしてそこに踏み込んでいかない。そして、その上で、お互いにとって何が未来にたいして幸せにつがるのか、今ここで相手のそういう出来事を明らかにして、そしてみんなの前に公表することが将来の幸せにつがらないと判断したからこそ、密かに縁を切るっていうわけです。いわゆる「正義の人」のから見れば、それは問題をうやむやにしているというふうに見えるかもしれないわけなんです。

でも聖書の判断は、それこそが、その何かをはっきりさせる、あるいはそれをみんなの前に公表する、あるいは正義の名のもとに誰かを攻撃する、それが本当の正義ではないんだと言っているように思います。

自分が分からぬことは分からぬものとして、ある意味では自分自身の境界線を踏み越えた行動をしない。だからこそ、その今身ごもっているということはマリアの問題なのでマリアが担うべき、そして自分はそこに踏み込むべき立場にないということで解消する。それがある意味では人間としてのレベルの正しい判断ということなんだと思うんです。それぞれの踏み込むべきでない、あるいは踏み込むことができないその未知の領域には自分はタッチしないしないという——それはマリアのことで、自分の人生、担うべき責任とは違うっていう。でも神様の正しさ、判断は、そのような正義の名のもとで人を攻撃するっていうから解放され、そして自分自身とそして他者が担うべき責任のその境界線をはっきりさせるということをときに超えて、神様のご計画があるんだということが、それに続く天使のお告げということ、そしてその後のヨセフの生き方が示してくれています。それは、今マリアが身ごもっているということをヨセフ自身の問題として担いなさいという、その神様のみこころが示されたということでもあるわけです。

これは、信仰者はどんなことにも当事者意識を持って首を突っ込んでいきなさいと言っているのではないわけです。わたしたちはまず人間として、ヨセフのように自分が踏み込むことができない、あるいは踏み込むべきことでないことにはちゃんと踏み込まないっていう、その自制と言いましょうか、その判断。でも、ときに神様はそれ

を超える行動を促される時があるのだということの可能性にも心を開いているということが、信仰者の一つの生き方、考え方なのではないかなと思います。

福音の中では、聖書の中ではその神様のみこころが、夢の中で、そして、天使が直接はつきり何をすべきか、その理由と、そして将来何をすべきかを告げてくるという形で示されています。分かりやすいようにですね。でも、わたしたちの人生ではそういうことが必ずしも起こるとは限らないし、むしろ起こらないですよね。天使がはつきり何をなすべきか、そしてその何をなすべきかの背景にある理由を明らかにしてくださるということがない。

でも、ときに、たとえば祈りの中で、自分が感じる一つの呼びかけというか促しであったり、あるいは場合によっては、色々な出来事が、距離を取ろうとしても否応なくその中に関わらざるを得なくなっていく物事の推移の中に、何か神様の導きを見出すっていう、そういうようなはつきりしないけれども、しかし自分として、これが神様のみこころとして受け取って良いのではないか、あるいはそうすべきなのではないかっていう呼びかけや出来事を通して感じことがあるのではないかと思うんです。そのときこそ、わたしたちが本来の人間の正しさを超える、超自然的な神様のみ旨を生きる、そこに呼ばれている瞬間であると言うことができるし、それはどんな人の人生にも必ずある。それこそが福音のわたしたちに対する呼びかけなのではないかなと思います。

繰り返しになりますけども、キリスト者は、信仰の名のもとにいろんな人の人生やプライバシーにどんどん首を突っ込んでいくべきなんだと言っているのではないわけです。わたしたちは正義の名のもとに誰かを攻撃するっていう、その快楽に身を委ねることからは注意する。それは基本であり、そして一方で、自分が担うべきことと他者が担うべきことのその区別をはつきりさせる。その上で、それこそがまず必要な人生の態度、しかしときにそれを乗り越み越えてさらにその先に行くように神様がわたしたちを呼ばれるときがある。それはいろんな形で、はつきりは分からない。天使が現れてお告げがない。でも色々なことを本当に誠実に祈りのうちに振り返るならば、そこに呼びかけを見出していくことができるのではないかと思います。

今日わたしたちが一人ひとりの中にイエス様をお迎えして信仰生活を新たに歩んでいこうとする、そのクリスマスを前にして、まさに人間として誠実に生き、しかし

神様の呼びかけに心を開くっていう、その恵みを、聖ヨセフの取り継ぎのうちに、まさにその救い主ご自身からの導きと、そしてまことの謙遜の恵みというという形で願い続けたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>
携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>